NIPPON かわら版 45号

NIPPON PAPER INDUSTRIES
日本製紙

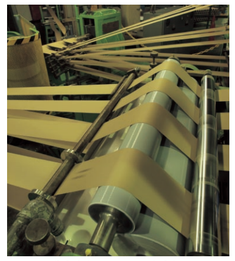
発行所 東京都千代田区一ツ橋一丁目2番2号 〒100-0003 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-3217-3161 www.np-g.com/ newsprint@np-g.com

©日本製紙株式会社2009

「新聞の復権をめざせ！」

有料であることの価値を皆で再認識しよう

新聞営業本部長代理兼新聞営業一部長　前田高弘



ART 製紙工場百景
photographer　新聞営業一部　雷井美夏

8ページ

一ツ橋から新たにエールを送る

面白くない民放

民放テレビが面白くない。広告収入を主な収入源にする民間放送とNHKを比較すれば、勝負はついたようなものだろう。ギャラの安そうな無名のお笑いタレントのクイズ番組やワイドショウの無責任なコメンテーターの発言に世の中が左右されているとしたら社会の質は益々低下しそうだが、おそらく個人はそれほど馬鹿ではないだろうと私は思う。民放関係者はインターネットの動画配信サービスやレンタルDVDが繁栄していることにもっと関心を向けるべきだろう。個人で情報を取捨選択できる時代になっているが、個人はそれほど情報の選択に自信がない。マスで流される大量、一方通行の情報に辟易しながら、どのように情報を得れば良いのか自信がない。「ミニコミ」「双方向」「パーソナル」というようなキーワードを復唱しながら、混沌の中にある。

記事と広告のアンバランス

新聞にも同じことがいえるのかもしれない。新聞が面白くなくなってきたように感ずる。記事内容が低下しているとは思わない。広告の苦境には目を覆うばかりであるが、広告も記事の内だとも思う。カロリーの低そうな広告が増えているが新聞にはカラーで商品イメージ全般を伝える品格のある広告が似合う。チラシのような広告を見ると記事内容まで低下してしまったような錯覚をする。

「新聞社は元気を出して欲しい」と私は以前から申し上げてきたが、我々は新聞記事の高邁さと広告の質の低下のアンバランスに気づく必要があるのかもしれないし、無意識にそのアンバランスを受け入れることに抵抗感を感じ始めている。そのことが新聞を面白くないと感じさせているのかもしれない。

アメリカの新聞社が著しく衰退しているのは広告収入や求人情報に大幅に依存しすぎたからであって、日本の新聞社とは事情が違うだろう。株主構成も公開企業が多く売買の対象になりやすい。アメリカの宅配率は結構高いが日本のような強力な個別宅配網がない。アメリカの人口は増えているが、ヒスパニック系の移民人口の増加によるところが大きい。非英語圏の新聞がどのくらい発行されているのか不明だが、アメリカの新聞の衰退は新聞を読まない移民人口の増加も影響しているのではないか。スペイン語の新聞が部数を誇っているとは聞かない。

有料であることを再認識しよう

情報がフリーであることが情報産業隆盛のきっかけにはつながらないと思う。４年ほど前に本紙33号で「フリーペーパーを追う」という特集を掲載した（当社ホームページで閲覧可能です）。フリーペーパーの隆盛に脅威を感じながら雑多な生活情報はフリー化している状況を追った。しかしフリーペーパーの何が面白いか？フリーペーパーの情報は携帯やヤフーの雑学情報に似ている。そんなフリーな情報から得られるものは雑学でしかない。有料であることの価値を再見直しする必要があるように思う。

日本の新聞社は言論の府として、また有料紙として、単なる情報産業とは一線を画してほしい。購読料を適正なレベルに上げることも私はいつか必要だろうと思う。印刷や配送面で現在取り組まれている新聞社間の協業化もさらに推し進めてほしい。新聞社に基礎資材を提供している新聞用紙メーカーとしてこの部分でもっとお手伝いできることがありそうだ。

（２ページに続く）

休刊日をやめてほしい

さらに敢えて言うならば新聞休刊日も廃止してほしい。官僚幹部の逮捕や有力な政令都市の市長選挙の翌日に、新聞製作を休むことは新聞離れを加速するだけだ。今年６月15日付朝刊が休刊だったが、前日に厚生労働省の局長が逮捕され千葉市長選挙で民主党新人が当選した。新聞の休刊日に味わう違和感が違和感でなくなってしまうことが恐ろしい。言論と情報に休みはないはずだ。協業化でこの部分もカバーできるはずだ。昔は年中無休宣言を出して30年間も１日も休まずに新聞を発行した有力紙もあったらしい。先人のこの気概を見習いたい。

好きなものだけを食べていると体を壊す。同じように好きな情報だけを選んで生活していると考えることがなくなり民主主義が衰退する。有料の新聞と有料の放送が世論をリードすべきときを迎えている。新聞への信頼感は強くその信頼性をさらに磨いて広告の不振をカバーできるようにしてほしい。地域エリアの仕事に欠かせない情報源として絶対的な存在感を発揮してほしい。有料であることの価値を再認識して社会の質を低下させないように我々はもっともっと新聞を読もう。新聞を読む次の世代を育てよう。

かわら版NIPPON 題字を変更!

さらば有楽町。日本製紙本社は平成21年５月、東京都千代田区有楽町から千代田区一ツ橋に引っ越しました。その昔有楽町は大新聞社のメッカでした。その地名を題字にして「有楽町かわら版」が創刊されたのは平成９年７月、お客様である新聞社の皆様に、新聞用紙メーカーの手作り専門新聞を読んでもらうと大それたことを続けてお蔭様で12年を迎えました。引越しを契機に「有楽町」を除き「かわら版NIPPON」と題字を変更、基本にかえってさらに読みやすい日本製紙の新聞用紙情報を新聞社・印刷所の皆様にご提供したいと思います。引き続きご愛読いただきますようお願い致します。

column「北の丸だより」

『伊豆高原で想う』

新聞営業本部長　藤崎夏夫

８月のお盆休みに、夫婦で伊豆方面へ温泉一泊の旅行に出た。熱海や伊東、熱川はずいぶん昔だが何回か訪れていたので、今回の旅行にもそれほどの期待は正直していなかったのだが、スーパービュー踊り子号で伊豆高原駅に降り立ってみると、40年前別荘地として売り出された地区を含め、軽井沢や箱根と同様のリゾート地が展開されていて、古い温泉地のイメージはどこにも感じられなかったのであった。

旅館はお湯も料理もそして景色も申し分なかった。豊かな緑と碧い海は、目も心も癒してくれた。

あくる朝、部屋で読んだ新聞のほかにもう少し目を通したいと、ロビーでコーヒーを飲みながら他紙を探すと中央紙や経済紙、地元の静岡新聞のほかに、はじめて見る「伊豆新聞」が目に留まった。勉強不足で知らなかったが、伊豆地方のみ集中的に発行している大変人気のある郷土紙である。私が見たものは伊東市が発行の住所であったが、熱海や下田賀茂でも発行しているとのこと。帰京後確認すると、流通経由で当社の製品をお使いいただいているようで、二重の発見であった。

こういうものに突然遭遇するということは、とても知的興奮を覚え、また胸を熱くする結果となる。しばしソファーに固まったまま食い入るように紙面をあさり、この土地の生活の実態とそれに呼応しようとする情報の交錯する様が次第に分かってくると、ほっとして肩の力が抜けていくのであった。郷土紙に栄えあれとエールを送りたくなってくるのである。

現在新聞は危機である。日々大きなニュースはテレビやネットで瞬く間に巷間にあふれ新聞は後追いでしかないように見える。

しかし、毎朝届くインクの匂いのする紙面を開くとき、大小の記事の中に生活に密着したニュースが垣間見えるとき、読み手の愛着の密度はさらに高まり、一人ひとりの人生の旅を豊かなものにしていってくれるであろうと感じるのである。私が旅の途中にほんの一瞬読んだ伊豆新聞が一時の心の豊かさを与えてくれたように。

一橋一丁（いっきょういっちょう）

愛知県にある明治村には文字通り明治時代の洋館が多数保存されている。明治村を訪れて洋館に魅せられて以来、洋館巡りは趣味の一つとなっている。◆各地の洋館を訪れる中で出会った建築家が、ウイリアム・ヴォーリズである。明治時代に来日し、手がけた建築は生涯で1500点以上とも言われる。関西学院大学や大丸心斎橋店、東京の山の上ホテルなど有名な建物も多い。◆ヴォーリズの作品は使う人全てが快適に過ごせるような配慮を感じる。先日ヴォーリズが戦前に設計した名士の洋館を見に行った。使用人の部屋が日当たりのいい場所にあるのが印象的であった。同日、他の設計者による洋館も見たが、使用人の部屋は日当たりの悪い奥まった場所にあり、違和感を覚えた。◆建築には設計者の思いが色濃く表れる。誰もが快適に過ごせるような理想の家を建てるため、今後も洋館巡りを続け、将来の参考にしたい。（T）

ZOOM

「新聞用紙のプロフェッショナル」玉置康博を解剖す。

玉置康博。日本製紙の誰もが認める、新聞用紙の品質面におけるプロフェッショナルであり、業界でも広く知られた男。今年11月で還暦を迎える玉置の紙に対する知識、知見はどのように培われたのか。彼の原点である釧路工場時代、東京転勤後の技術サービス時代に迫る。

全てが勉強の釧路時代

36歳の再スタート

昭和60年の夏。目の前ほんの数mも見えないような深い霧がたちこめる深夜２時の釧路工場。そこに、薬品の溶解作業を黙々と続ける一人の小柄な男の姿があった。その男の名は、玉置康博。十條製紙アイスホッケーチームの中心として17年間プレー。日本リーグ最前線で、30cmも大きな外国人選手と対等に渡り合い「氷上の牛若丸」と呼ばれ、今では「品質のプロフェッショナル」と称される男である。その玉置の会社人生第二のスタートは、意外にも36歳と遅いものであった。

ホッケーのプロから、仕事のプロへ

長いアイスホッケー生活を終えた玉置は「今後は仕事のプロになる」という決意を胸に秘め、新たな職場である品質管理部へと配属された。原料や薬品の配合を考える、品質設計の核心部分を担う部署だ。幸い入社後６年間、十條製紙ホッケー部が日本リーグに加盟するまでの間、３交替勤務で紙の品質試験を担当しており、紙の基礎知識は持っていた。とはいえ、復帰後すぐの人間にとっては、重責と言って差し支えない仕事である。

パルプがない！

そうして新聞担当となった玉置を、さっそく難題が待ち受けていた。当時、新聞印刷の主流は活版印刷。新聞用紙抄造の際には、着肉を良くするために機械パルプを配合することが必須だった。しかし、当時の釧路工場の機械パルプ製造能力はわずか200トン程度。これを複数のマシンで分け合うため、パルプ設備は常にフル回転、ギリギリの操業を迫られることになる。ちょっとしたトラブルでパルプが不足し、生産ラインの組み換えを行うこともしばしば。品質設計、生産管理の立場からすれば非常にストレスの溜まる環境だ。しかし、ここで常にギリギリの原料配合を迫られたことで、玉置はパルプの配合と紙の品質の相関性を体で学ぶことができた。

設備もない！

原料だけでなく、薬品でも難題は山積していた。当時はゲートロールサイズプレスを導入する過渡期であり「澱粉や薬品を新聞用紙の表面に塗布する」という概念がほとんどなかった。そのため薬品の添加設備も不十分であり、担当者としては添加する場所、方法、量について、自分で理論を構築し、実践しなければならない。冒頭のように、夜の２時まで薬品の溶解のために残業することや、壊れた添加用のポンプの代わりを探して工場内を走り回ることも当たり前だったと言う。

入社当時の分析室勤務

釧路時代を振り返って

当時の経験について玉置は「薬品を添加するために、マシンの構造や操業についても勉強できたこと。パルプや薬品が紙に与える影響について、自分で仮説を立て、実践し、お客様からのフィードバックを得て確認できたこと。工場でのこの２つの経験は、本当にためになりました。」「当時の上司が『とにかくやれ』と全面的に任せてくれた上、良い同僚にも恵まれたことが大きかった。」と人情家らしい一面を覗かせながら振り返っている。

アイスホッケー現役時代（左から2人目）

対策に追われた技術サービス時代

転機

昭和63年、品質管理課勤務４年目に転機が訪れる。東京での技術サービス勤務について、上司から打診されたのだ。かなり迷った末、玉置は転勤を決断する。

凸からオフへ

そうして転勤してからの数年は、ちょうど活版印刷からオフ印刷への大転換期。関東は新印刷工場の建設ラッシュ、それに伴う増ページ化と、激動の時代を迎えていた。新しい時代に合わせた用紙品質の確立に向け、赴任先の東京でも玉置は走り回った。今度は生産現場ではなく、印刷現場での試行錯誤の毎日が続いた。

オリンピックを乗り切れ

思い出深い出来事の一つとして、玉置はソウルオリンピック時の大クレームを挙げている。あるオフ印刷の印刷所では、オリンピック期間中に８ページの増ページを敢行。すると、それまで全く問題なかった釧路品で紙流れが多発。黒損の山を築き、大クレームとなってしまった。何とかしようにも、当時はオフ印刷向けの用紙品質について確立した知識がなかったため、効果的な対策をすぐに実践できない。

だからといって、何もしないのは、お客様に「オリンピック期間中、黒損とお付き合いください」と言っているに等しい。少しでも早く原因を掴もうと、抄造現場の人間までもを動員した、人海戦術での朝刊立会が連日行なわれた。

手探りの原因究明

「テンションやニップ圧、給紙部の挙動など、輪転機の始めから終わりまで、さまざまな部分を手分けして観察し続けました。とにかく手探りの状態で、紙流れが起きると、立会者が集合して自分の担当箇所での紙の挙動を報告する。そこで得られた情報をもとに、また輪転機を観察する。その繰り返しです。」と玉置が語るように、原因究明に向けて手探りの日々が続いた。

こうした立会陣の努力の甲斐あってペースター時に紙流れが起きやすいこと。紙流れにはテンションバランスが大きく関係していること。ターンバー部分でテンションが下がっていること。と順番に現象を解明。この情報を元に、玉置が釧路時代に培った知識を生かしてさまざまなテストを実施した。最終的には紙の表面性を調整することで、何とか事態を沈静化させることができた。

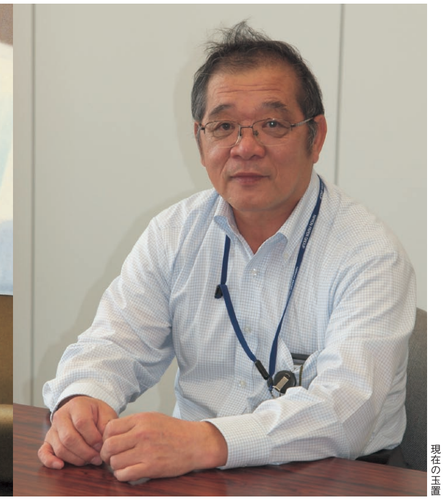
技術サービス時代を振り返って

「今では輪転機が自動化され危険区域に立ち入れないことも増えました。しかし、当時トラブルがあるごとに輪転機の近くで用紙の挙動を観察できたことは、本当に自分の財産になっています。」「何度もテスト品を持ち込んでも、解決のためならと協力して頂いたことにも本当に感謝しています。釧路時代もそうだが、私はつくづく良い人との出会いに恵まれました。」と玉置は技術サービス時代を振り返る。

釧路時代の抄造現場での経験を背骨だとすれば、これらの印刷現場での立会経験は玉置の血肉となった。36歳からという遅いスタートにも関わらず、今日の玉置がプロフェッショナルとまで称されるようになった所以は、この二つの濃密な経験なのだろう。

東京勤務後の印刷立会

若かりし玉置


現在の玉置

品質保証部「玉置部長代理」インタビュー

11月で還暦を迎えますが会社生活を振り返っていかがですか？

『人に恵まれてここまでたどり着いた』この一言につきます。お客様はもちろんのこと、会社の上司、同僚、部下に恵まれたと思います。私は「何事も最後は人」と常々思っているので、人との出会いに恵まれたことは本当にありがたいと思っています。

品質保証業務を担当し始めた当時と現在とでは状況が大きく異なると思いますが、どのように受け止めていらっしゃいますか？

私が品質保証を担当し始めた当時は、まだ活版印刷が主流でした。オフセット化と共にカラー化も進み、サテライトやタワープレスが次々と導入されて行きました。そうした中で、それまでには経験したことのない印刷トラブルが発生したのを記憶しています。増ページも作業性には大きな影響がありました。また、全国紙さんが、全印刷工場の紙面を集めて紙面品質の横比較を行うことは従来なかったと記憶しています。

印刷技術や紙面品質は大きく向上した訳ですね。

印刷技術が進歩するにつれて、輪転機だけでなく、インク、紙、版、プランといった諸資材の技術も当然大きく進歩しています。従来は、それぞれのメーカーの処方や基礎技術には大きな差がなかったと思いますが、全般的な技術の進歩に従って、サプライヤー各社の技術も次第に独自色が強くなっていったように感じます。例えば一言で新聞用紙といっても、現在では各社で造り方はさまざまです。これは他の資材にも当てはまることだと思います。実際に印刷現場で紙が使用される場合、諸資材の組み合わせは幾通りにもなる訳で、なかなか単純には行かないと痛感しています。許容幅の広い紙が求められるのでしょうね。

品質保証業務の醍醐味はどこにあると考えていますか？

変な言い方になってしまいますが『醍醐味はトラブルにあり！』と感じています。品質トラブルが発生している時こそお客様とのコミュニケーションが取れるし、輪転機について学ぶことができると思います。紙に関連する印刷トラブルも、化学的側面が強いものや物理的特性に起因するものさまざまです。それらの原因をつかみ、対策を考え、それが結実した時の達成感は品質保証業務でしか味わえないと思います。

品質問題の解決に取り組む際に重視していることは何ですか？

『常在現場』。ありきたりかもしれませんが、やはり現場を見ることを最重視しています。それに加え「最終的に何がお客様のためになるか？」を考えるようにしています。例えばある印刷トラブルが他社品で全く発生せずに、当社品のみで発生する場合には、用紙で対応しなければならないと思います。しかしながら他社品でも少なからず発生していて、当社品が比較論で程度が悪いというケースもあります。そうした場合には紙だけで対応しても問題を解消することは極めて難しいと言わざるを得ません。一時的に良化しても、根本的な原因を覆い隠す結果となり、結果的に問題を長引かせユーザーの皆様にご迷惑をかけてしまうこともあります。お客さんにとって耳障りなことを主張しているのかもしれませんが、最終的にはこちらの意図を理解して頂けるはず！という信念でお話しています。

最前線に立つ一方で、後進を育てる立場だとも思いますが、部下の方には何を期待していますか？

先程の話と重なりますが、積極的に現場を見ることです。これは部下にも繰り返し伝えています。但し、漫然と輪転機や走行紙を見ていても何も分かりません。なぜ、そしてどこで問題が発生しているのか、一つ一つ考えてみることが重要です。原因の追究、対策の立案、結果の確認を繰り返す中で、『診る眼』を養っていくことを期待しています。また、輪転機だけでなくインクや版など他の諸資材についても知識を深めてほしいと思っているので、不定期ではありますが勉強会を開催しています。いずれにしても、どんどんお客様の下に足を運んで、信頼を勝ち取ってほしいですね。

ユーザーの皆さんにメッセージをお願いします。

技術の進歩に伴い技術が細分化してきているので、印刷トラブルの原因がつかみづらくなっています。輪転機自体も、中の走行紙が確認できないタイプの物も出現しています。これらのことにどう対応するかが今後の課題と思います。秘密保持の観点からするとハードルが高いのかもしれませんが、お互いにある程度の情報を開示し、要因を解析しなくてはならない時期に来ているのだろうと思います。新聞社の方との勉強会を積極的に行い、足りない部分を補えればと思います。昔と比べるとユーザーの方も、インキや版の組み合わせ等、色々と柔軟に試してくれるようになりました。そうしたご配慮には本当に感謝しておりますし、良い結果につながっていると思います。トラブルが発生している時だけでなく、平時からさまざまな印刷テストが実施できれば、良好な品質を見出す上で大きな力になるのではないかと考えています。これからもご支援とご鞭撻を宜しくお願いします。

（インタビュアー　かわら版NIPPON編集委員　佐藤貴光・伊藤 淳）